

Title	変身の奇蹟：ホフマンの『悪魔の壺液』に見られる自己同一性の概念について
Sub Title	Über den Begriff der Selbstidentität in E. T. A. Hoffmanns Roman "Die Elixiere des Teufels"
Author	梅内, 幸信(Umenai, Yukinobu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.301(146)- 311(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0311

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

変身の奇蹟

——ホフマンの『悪魔の霊液』に見られる

自己同一性の概念について——

梅内 幸信

1 光と闇のごった煮

ホフマン (E. T. A. Hoffmann, 1776-1822) によって完成された唯一の長編小説『悪魔の霊液』(1815-16) は、端的に言うとも、バンベルク時代におけるユーリアとの失恋体験による苦悩を芸術的に昇華するために、一気呵成に書き上げられた。しかしながら、その出版に際しこの長編小説は、予想以上に多大の困難を乗り越えねばならなかったのである。というのも、格式あるレストランで然るべき礼儀作法に従って食事を取りたいと願うホフマンの友人たちの趣味からして、お世辞にも高級料理とは言いがたい「ごった煮」は、彼らの食欲を大してそそらなかったからである。ホフマンは、この料理の材料としてまず、18世紀後半のドイツにおいて大いに人気を博した通俗・娯楽小説の一ジャンルである恐怖小説、あるいは当時イギリスにおいて爆発的に流行していたゴシック小説から豆や野菜といった安価な材料を、即ち夜の闇、昼なお暗い森、嵐、荒涼とした地方、荒れ果てた古城、秘密の地下道、壁の隠し戸、納骨堂といった舞台背景と、短刀やローソク、拷問道具、毒薬といった小道具を取り入れた¹⁾。また次に、舌触りと味を良くするために、当時ドイツ全土に熱病のように広がっていた運命悲劇からベーコンやソーセイジといったこれもまた安価な材料を、即ち近親相姦、災難の予言、一族の呪い、近親殺人、帰郷というモチーフを取り入れた²⁾。これに塩、胡椒、ジャコウソウ、レモン汁といった薬味を多少加え、味付けをしたのである。これは、さしずめルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) とシェイクスピア (William Shakespeare,

1564-1616), ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853) とジャン・パウル (Jean Paul, 1763-1825), カルデロン (Calderón de la Barca, 1600-1681) とゴッツィ (Carlo Gozzi, 1720-1806), シュレーゲル兄弟 (August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845; Friedrich von Schlegel, 1772-1829) とノヴァーリス (Novalis, 1772-1801) といった作家たちの文学の薬味になるかと思われる。

ごった煮の調理法は、さして難しくない。注意すべき点はただ一つ、これらの材料の味が互いに調和するように、適度な温度でじっくりと根気よく煮込むことである。これを上手にできさえすれば、ごった煮は見栄えのしないものであるにもかかわらず、大変滋養に富んだ素晴らしい料理になる。その表題からしていかにも暗いイメージをもつ『悪魔の霊液』は、さしずめレンズ豆のごった煮に当たるであろうか。しかしそこには、単に暗いイメージを喚起する闇や悪、醜いもの、狂気、不気味な悲鳴、幽霊、グロテスクなものばかりではなく、これと同時に明るいイメージを喚起する光や善、美しいもの、敬虔な心、天なる声、聖女の姿、崇高なものも描かれている。これらの対立と共に、意識と無意識という強力な対立原理が、この物語をダイナミックに突き動かす駆動力となっていると言えよう。光と闇がまばゆく入り混じり、絶望と希望が激しく交替し、過去・現在・未来が奇妙に交替する幻想の世界は、次々とアラベスク模様を織り成す万華鏡の世界にも準えることができる。ところで、一見して複雑怪奇な印象を与えるが故に、あまり食欲をそそらないこのごった煮も、「自己の分裂と統合」ないし「分身」というテーマに焦点を絞る時、この料理が現代的なテーマを含んだ極めて滋養に富む料理であることが、徐々に判明してくるのである。

2 変身の決意

主人公メダルドゥスは、四代前の先祖である画家フランチェスコが魔女と交わったがために一族に降りかかった呪いを解くべく生まれついている。幼い頃父親に死なれた主人公は、貧しいが、しかし、信心深くて優し

い母親の愛情に包まれて育ち、そして、16歳の時修道士になるために、カプチン会修道院で神学の勉強を始める。ところが、親切な修院長レオナルドゥスの下で広い教養を身につけ、敬虔な信仰生活に身を捧げれば捧げるほど、逆に現世の享楽、悪魔の邪悪な誘惑がメダルドゥスを執拗に襲ってくるのである。その都度諸々の禁欲的苦行によって、彼は辛うじてこの誘惑を克服する。こうして彼は、やがて説教師として名声を馳せるまでに至るのであるが、しかし同時に、自分の先祖である画家フランチェスコと同じように、高慢で不遜な考えにとりつかれ、野心が芽生え、挙句の果てには自分を神の選民であると思いつまようになる。それどころか彼は、人々は自分を聖者と見做し、偶像として崇めるべきであるという妄想に捕えられてしまうのである。ところが、彼の説教の場にまたしても異国の画家が忽然と姿を現すと、メダルドゥスはどのような訳か完全な錯乱状態に陥ってしまう。この事件によって彼の精神力はすっかり衰弱し、そしてその結果、病人のように扱われるまでに至ると、メダルドゥスは絶望的な気分襲われる。こうして彼は、「夜眠られず、深い悲嘆にひどく苦しめられながら、たとえ破滅に至ろうとも、失われた精神力を再び回復するために、やれることはなんでも生命賭てやってみよう」と決意³⁾し、ついに悪魔の靈液を飲むに及ぶのである。

苦悩の末、修道院からの出奔をも考え始めた頃、メダルドゥスは幸運にも修院長からローマ行きを命ぜられる。その途上、山岳地帯にさしかかった時彼は、オイフェーミエと首尾よく密通するためにカプチン会修道士に変装しようとしていたヴィクトリーン伯爵に遭遇する。しかし、断崖の上で転寝をしていたヴィクトリーンは、すでにカプチン会修道士の衣服を身に着けたもう一人の自分を眼前に発見してびっくりし、その恐怖のあまり谷底に墜落してしまう。メダルドゥスは、ヴィクトリーンが自分と瓜二つであることに気づくと、躊躇せずヴィクトリーンの役割を演じ始める。そして、ヴィクトリーンになりすまして、彼の過去をも自分の身に引き受けることになる。しかし、その姿も説教師としてのメダルドゥスを知っている、F男爵の忠告役ラインホルトの前では変装ではなく、真実の姿に他な

らない。こうして彼は、ラインホルトの前ではメダルドゥスとして振舞い、同時に密通の相手であるF男爵の若い後妻オイフェーミエの前ではヴィクトリーンとして振舞わざるをえなくなる。これによってメダルドゥスの自己は、虚像と実像の間に挟まれ、急速に分裂する羽目となるのである。

F男爵の城で、よもや自分の従姉妹・従兄弟とは知らず、オイフェーミエとヘルモーゲンを殺して逃亡する破戒僧メダルドゥスは、深い森の中で自らの意志で別人になり変わろうとする。彼は髭を刈り、髪を整え、修道服を脱ぎ捨て、平服に着替える。そして、商業都市に着くと、理髪師のペルカンポに髭を剃り落とさせ、さらには、修道士独特の歩き方や態度すらも捨て去って、全くの別人に生まれ変わろうと努める。つまり、自分の過去をも消し去ろうともくろむのである。侯爵邸でメダルドゥスは、レオナルトと名乗る。ところが、そこで思いもかけず、彼を知っているアウレーリエに再会し、自分の正体があやうく暴露されそうになるとメダルドゥスは、「B町の神学校で一緒に勉強した一人の若いポーランド人のことを思い出し、平凡な彼の経歴を拝借しようと決意する」(S. 196)に至る。自分の過去を捨て、その代わりに他人の過去を借用しようと試みるのである。この虚偽の行為によって、即ち自分の過去、さらには現在と未来を作ってゆくことによって、メダルドゥスの自我はまるで万華鏡の中のアラベスク模様のように千変万化し、最後にはどれが本当の自我であるのか自分でも分からなくなってしまう。それどころか、逮捕されて牢獄の中に閉じ込められると、彼はなんとか罪を逃れようとして、自分の無実を証明する虚偽の物語を捏造しようともくろむのである。彼は、ヴィクトリーンやメダルドゥスと出会ったこと、そして、彼らと自分が非常によく似ていること、さらには、F男爵の城での恐ろしい事件を人から聞いた話として作り変えるという具合にして、過去と現在を結びつける嘘の織物を作り上げてしまう。この虚偽の物語に基づく自己の客体化によって彼の自己は益々分裂の度を深め、やがて現実と夢とを区別できないほどの混乱に陥る。これによって、やがて彼は自己同一性喪失の危機に直面することとなるのであ

る。

3 同一性の概念

メダルドゥスは、自己同一性喪失の危機に曝される。が、しかし、アウレーリエへの憧れからくる求心力に支えられて彼の自己は、その分裂の度合いが頂点に達した後に、今度はその統合が計られてゆくことになる。この自己同一性の回復はかなり複雑な過程を辿ると思われるので、まずはここで同一性に関する理論を探ることによって、この概念を幾分なりとも明確にしておく必要がある。

二つのもの、即ちAとBが同じであるという命題は、日常においてもよく使われる論法であるが、しかし、この命題を論理的に厳密に規定しようとすると、意外に難しい問題を含んでいることが判明する。それどころか、異なる時点、あるいは異なる場所における二つのものが同じであるということを説得力をもって証明することが必要となる場合、それはかなり面倒な手続きを要するものと思われる。D. ヘンリヒによると、「プラトンが最初に『である (ist)』を、『～と同一である (ist identisch)』という意味の判断を示すコプラから区別した後に、アリストテレスが数と種属に関する区別を導入し、哲学上の同一性問題を、ある個別のものとの関係という問題へと方向づけることができた⁴⁾」と言われる。アリストテレスの哲学に従うと、実体は形相と質料から成っており、形相はある物を他の物から区別しうる本質的な特徴である⁵⁾。ある一つの実体が一定の時間の経過の後、異なる空間において同じ実体のままであるためには、ここで質料が穏やかに交替していることを許容するとしても、まずその実体の質料の量が同じでなければならない。また同時に、その形相を構成する本質的な属性を保有していなければならない。この考えに従うと、ある人間を一定時間の経過の後、異なる場所において同一たらしめる要因は、主として身体に関する形状と特徴の同一性であると考えられる。しかし、この身体の同一性によっては、メダルドゥスとヴィクトリーンは区別されない。というのも、物語の中で両者は単に姿格好ばかりではなく、「首の

左側にある十字架の赤い痣」(S. 204)という極めて稀な身体的特徴に至るまで酷似している人物として描かれているからである。それ故、自己の分裂と狂気を経て自己実現に至る彼の霊的救済への道程を説明するためには、身体を同一性の根拠とする以外の理論を求めなければならない。ここに、同一性に関する理論の大きな転換点が見出だされる。

アリストテレスは、同一性の問題と実体の問題とを結びつけることによって、17世紀後半に登場するライプニッツ (Gottfried Wilhelm von Leibniz, 1646-1716) に至るまで連綿と続く個性化の原理の規定に関する研究の幕を開けたのであった。ライプニッツは、同一性の問題に関して、「二つの中で一方についてありのまま語られることがすべてもう一つのことについても語られるとすれば、その二つのものは互いに区別されえず、まさしく同一のものである⁶⁾」という定義を提出している。しかし、この定義によってもメダルドゥスとヴィクトリーンは区別されえず、両者は同一の人物になってしまう。というも、両者は身体並びに身体的特徴において酷似している上に、この両者の間にはある不思議な感応関係があり、一方の行動は自動的に他方に情報として伝わってしまうからである。

4 自己同一性の概念

同一性の理論から近代の自己同一性の理論に向けてその重要な第一歩を踏み出すのは、イギリス経験主義の哲学者ホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) である。彼は、すべての精神内容を感覚経験に還元し、さらに、この経験はすべて脳やその他の身体の部分において行なわれる運動の特殊な形式であり、運動の強度、広がりやの違から完全に説明されると考えたのである⁷⁾。ホッブズのこの唯物論的発想によって、たとえ人間が新陳代謝によって体内の物質がすっかり変わっても、その人間の思考・行動様式が同一の原理に基づいていれば、同一の人間であるとする解釈が可能となったのである。一般に、複数の人間が完全に同一の原理に基づく思考・行動様式に則って生活することは、ほとんどないと言って差し支えないと思われる。しかし、『悪魔の霊液』において、主人公メダルドゥスとその分

身であるヴィクトリーンと神秘的な感応関係をもっているという暗黙の前提を考慮に入れると、ホッブズの理論をもってしても、ライブニッツの定義と同様に、両者の明確な区別は困難であると言わざるをえない。

このホッブズ以上に首尾よくデカルトの生得観念から離れることに成功したのは、イギリスの経験主義の哲学者ロック（John Locke, 1632-1704）である。彼は、人間の自己同一性が身体上の諸特徴とは無関係に、意識ないし観念の統合体である人間の記憶によって成立しうることを確認したのであった。彼の考えに従うと、「白紙」（*tabula rasa*）にも例えられる心は、二つの方法、つまり一つには「感覚」（*sensation*）即ち外部感覚によって、また、もう一つには「感覚によって与えられる材料の反省（*reflection*）」即ち内部知覚によって、多くの観念を獲得すると言われる。⁸⁾この関連において、自己同一性は、意識と観念の統合体である人間がもちうる「個人的記憶」（*personal memory*）、しかも「直明な記憶」（*apparent memory*）によって獲得されることになる。⁹⁾この定義によって、ある人間が一定時間の経過後、異なる場所にあるにせよ、過去において経験したことを直明に覚えている時、その両者は同一であると言えることになるのである。もっとも、この直明な記憶は、歴史的な事実の記憶、また、泳いだり自動車を運転したりという一般的な知識の記憶から区別されなければならない。その判断の基準が外部感覚から内部知覚へ転換したという点において、このロックの発想は実に画期的なものであると言えよう。つまり、ここに至って初めて、直明に覚えている過去の経験を根拠として、「あれは私だ」という意識の連続性によって自己同一性を獲得しうる可能性が拓けたのである。ただし、それは一つの難点を含んでいると言わざるをえない。というのも、ロックの記憶の連続性は、一本の線上で考えられている故に、その記憶の線は「忘却」という人間の普遍的特質によって断ち切られてしまう恐れが十分にあるからである。いわんや、虚偽の過去によって積極的にこの記憶の連続性を断ち切ろうとする場合には、言うまでもないことである。そうなると、その断絶によって必然的に自己同一性も不連続で、不完全なものにならざるをえないのである。

同じくイギリス経験主義の哲学者であるヒューム (David Hume, 1711-1776) は、自然科学における方法を用いて、先入観なしに観察される現象のみを対象として人間を研究しようと試みた。彼は、ロックとは違い、自己同一性は直明な記憶によって獲得されるのではなく、当該の人間の世界に対する信念や態度¹⁰⁾、換言すると、その人間の「良心」に基づく主体的態度、即ち性格の形成と共に獲得されると考えたのであった。また彼は、記憶とは因果関係であって、しかも、「過去の“知覚”の模写¹¹⁾」であると解釈するのである。この関連においてヒュームは、人間を身体を伴った心的状態であると見做し、これを思考、感情及び想像といった全く異なった「諸知覚の束または集合」(bundle or collection of different perceptions)¹²⁾であると規定する。このように、人間の記憶も、ロックの考えるように一本の線分ではなく、むしろ複数の知覚から成る束であると考えられる。このように考察すると、誕生から死に至る人間の一生において、たとえ一本の知覚が不連続であるとしても、その知覚が束になることによって、知覚の軌跡、即ち一個体の人生の連続した記憶を跡づける理論的可能性が出てくることになる。

5 変身の奇蹟——過去の再構成——

このように考察してみると、メダルドゥスを彼自身のシャドウとも言えるヴィクトリンから区別する唯一の手がかりは、良心の有無であると言わざるをえない。メダルドゥスがアウレーエへの憧れに支えられて、最後まで彼の良心を失わなかったからこそ、自己の分裂にもかかわらず自己意識の主導権を保持し、自己の統合を図ることが彼に許されるのである。なんといっても、現在から幼年時代にまで遡る記憶の軌跡を辿り、主体的な自己の良心に照らして正しい過去を再構成することが、人間にとって自己同一性を獲得する重要な前提であると思われる。これが実現した時初めて、人間は時間軸の上に首尾一貫した自己同一性を確認する可能性を獲得するのである。

メダルドゥスも、ローマに向けてカプチン会修道院を去った後、ヴィク

トリーン伯爵とポーランド人レオナルトになりすますことによって、即ち自分の過去を忘れようと試みることによって、自己同一性喪失の危機に陥ったのであった。「転機」と名づけられた第2部第1章以降彼は、自己同一性の回復を期して、徐々に過去へ遡行し始める。第2部第2章「贖罪」において、彼はイタリアのカプチン会修道院で修院長に自分の過去の罪をすべて懺悔する。そしてここで、自分の四代前の先祖がその犯した罪を告白した手記を読むのである。こうして、灰色のペールに包まれて、すべてが生彩を欠き、謎に包まれている一族の過去の軌跡を、一つ一つ再構成し始める。そして最後に、波瀾万丈の人生の出発点であったB町のカプチン会修道院の修院長レオナルドゥスにすべてを告白し、これによって他人のペルソナを完全に捨て、自分の過去を取り戻すのである。とはいっても、この時点ではまだ未来への展望が拓けているとは思われない。ここでは、過去と現在とが結びつけられたに過ぎない。彼の存在は、まだ未来へは企投されていない。未来への自己企投によって、メダルドゥスの自己同一性は最終的に完全に獲得されることになるが、しかしそのためには、彼のアニメを具現しているアウレーリエの殉教による霊的救済が必要となるのである。つまり、蝶は諸々の細胞分裂の過程を経た後に、蛹から脱皮して初めて蝶となるように、人間も自己分裂の後に自己を統合して自己を確立するためには、最終的に自分をそれまで守ってくれていた殻を脱することが必要となるのである。

以上のような考察を踏まえると、『悪魔の霊液』の主人公メダルドゥスは、自分の過去を偽ることによって自己同一性喪失の危機に陥ったのであったが、しかし、アウレーリエの愛に支えられて、過去の罪を懺悔し、良心に基づいて過去から現在に至るまでの首尾一貫した自己の軌跡を記憶によって再構成し、さらにこれを未来に企投した時、まさしく蝶へと変身する可能性が彼に与えられたと結論づけることができる。

ホフマンの死後、その文学もまた深い眠りへと陥り、若干の例外を除けば、彼の文学はそれほど肯定的に評価されなかったし、熱心に読まれもしなかった。時が流れ、その後ホフマン文学の真価を持ち前の鋭い洞察眼で

見抜き、19世紀末から20世紀初頭にかけて『ロマン主義』（2 Bde. 1899／1902）を著したフーフ（Ricarda Huch, 1864-1947）は、その中でホフマンを、肉体との関連において次のように評している。「ホフマンは、自分の小さくて、醜いというよりはむしろ滑稽な肉体に、即ちその燃え滾る血潮によってたちまち焦熱の地獄と化す敏感な肉体に満足できなかったのである。この肉体についてホフマンは、すでに少年の頃、肉体をもはや長くは使えず、肉体の衣をまとわないで身まかると考えていた。しかし、死によって肉体の衣を脱ぐことが可能となるまで、居心地が悪く、重苦しい肉体の住居を離れるために、芸術は少なくとも一時的には役に立ったのである。」¹³⁾

まさしく、ユーリアとの失恋体験を克服するために、ホフマンは『悪魔の霊液』を書き上げたのであったが、官能的欲望の虜となるその主人公メダルドゥスは、ホフマン自身の分身に他ならぬであろう。愛の激しい憧れに身を焦がされながら、重苦しい肉の衣の中で悪戦苦闘するさまは、ひたすら脱皮する時を願ってその醜矮な姿に堪えている蛹を想起させる。官能の毘にはまり、悪徳に陥り、拳句の果てには近親をも殺すという大罪を犯すに至ったメダルドゥスではあるが、にもかかわらず最終的には、丁度蚕がその脱皮の直前に、それまで摂取した一切のものを糸として吐き出すように、一切の罪を告白し、心から懺悔し、さらには厳しい苦行を自分に課す。このように、肉の衣をまとったことから生ずる諸々の苦悩と葛藤を経た末の決死の脱皮であるからこそ、自己統合の後に救済され、変身して蝶のように軽やかに天国へと旅立つメダルドゥスの魂は、読者に大きな美的感動を与えるのであろう。

注

- 1) Vgl. von Wilpert, Gero: Sachwörterbuch der Literatur. Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1969, S. 680.
- 2) Vgl. Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. 3. Bd. Walter de Gruyter, Berlin·New York 1977, S. 626-633.
- 3) Hoffmann, E. T. A. : Die Elixire des Teufels. In: E. T. A. Hoffmann,

Sämtliche Werke in sechs Bänden. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1988, Bd. 2/2, S. 46. 以下、この作品からの引用については、引用末尾に頁数を付す。

- 4) Vgl. Henrich, Dieter: „Identität“ —Begriffe, Probleme, Grenzen. In: Poetik und Hermeneutik VIII, Identität. Wilhelm Fink Verlag, München 1979, S. 137.
- 5) アリストテレス 『形而上学』 川田 殖・松永雄二訳, 「世界の名著 8」所収, 中央公論社, 東京 1975年, 467-481頁参照。
- 6) Vgl. Henrich, D.: a. a. O., S. 138.
- 7) ホップズ 『リヴァイアサン』 永井道雄・宗片邦義訳, 「世界の名著 28」所収, 中央公論社, 東京 1987年, 56-57頁参照。
- 8) ロック 『人間知性論』 大槻春彦訳, 「世界の名著 27」所収, 中央公論社, 東京 1986年, 81頁参照。
- 9) S. シューメイカー, R. スウィンバーン 『人格の同一性』 寺中平治訳, 産業図書, 東京 1986年, 11-12頁参照。
- 10) ヒューム 『人性論』 土岐邦夫訳, 「世界の名著 27」所収, 中央公論社, 東京 1986年, 441-451頁参照。
- 11) S. シューメイカー, R. スウィンバーン 『人格の同一性』, 17頁参照。
- 12) 同書, 17頁参照。
- 13) Huch, Ricarda: Die Romantik. Rainer Wunderlich Verlag, Tübingen 1951, S. 528.

〔尚、本稿は、第42回西日本支部総会・研究発表会(1990. 11. 16)で口頭発表した「記憶による過去の再構成——ホフマンの『悪魔の霊液』に見られる自己同一性の概念について——」に加筆したものである。〕